

岸見の石風呂

染谷 秀雄

俳人協会山口県支部の俳句大会に赴くために前日新山口駅に降り立った。小雨であったが支部事務局長青池亘さんのご好意に甘え防府市内をご案内いただく折、昭和三十九年「夏草」同人の地元三木河東氏の「劫なる石」という文章にあった徳地町岸見の石風呂を見たくて案内してもらった。

目的地へは駅から車で三十分ほどの処で外観は一棟造りの萱葺屋根で扉を開けると中には幅四・四米、奥行三・六米、高さ一・八米の花崗岩の石室となっていて仄暗く土間には石が敷き詰められていた。

石室の中で小枝を燃やして石を焼き、火を掻き出した後、濡れた蓆を敷いて熱気浴をする方式である。一一八〇年平重衡による兵火で焼失した東大寺大仏殿再建の大勧進にあたり国家的大事業の責任者で防府の新国司になった重源上人が再建に用いる良材を求めて周防国の杣山に入り木材の伐採、運搬、運搬経路の整備などを行った。建築対象が巨大な大仏の上屋なので棟木三七米を筆頭に垂木の末でも十五米という巨木を百五十本以上も峻険の中国山系「滑」から伐り出しそれが瀬戸内海に泛ぶまでの行程で佐波川に百十八箇所、の井堰構築や三百余町歩の困難な道路工事一切を周防国の人夫で賄わなければならぬ。そこでこれら貴重な人夫の消耗を防ぐために重源上人は石風呂造りを思い立った。

その石風呂の仕組は「土間に積み重ねた薪や落松葉に下人が火を点けると口を開けた焚口は紅蓮の炎を吐き、石組を塗り固めた泥土は湯気を上げ、萱葺の上屋は白煙の中に揺曳」するという。この石組がしつとりと火熱を吸収し、すると煙を土間から掻き出して濡れ蓆を火ぼてりの土間に敷き連ね、傷ついた人夫を横たえる。すると病者から苦痛そのものが慢心の汗となって吹き出すとき快い虚脱感が襲ってくる。その病者を下人が石風呂から抱え出して囲炉裏の前に横たえたとき、垂れ蓆から爽快な山風が忍び寄って病者は虚脱から甦り、茶を煎じた薬湯を口にしたとき重源上人の慈愛を感じるのである。現代でも重源上人を感謝する慣わしが命日の六月五日「石風呂開山忌」として行われている。

石風呂をあとにする頃にはこの里山も雨が上がり昼の虫が心地よく響き渡っていた。